

中国農曆重陽の民俗

周星[※]

世界中の大多数の民族と同様、古代の中国人も一連の年中行事によって一日一日、一年一年繰り返される生活を営んでいた。年中行事は中国の民俗文化の重要な部分を構成している。それは日常と非日常を分けることによって単調な時間の流れに文化的な意味を付与し、自然のリズムと社会生活のリズムを調和させていたのである。従って一年に一度の年中行事には象徴的な意味合いが多くこめられている。

古代中国の歳時民俗の中で、重陽節及びこれに関わるさまざまな重陽の風俗は、独特の魅力を持ち、悠久の歴史をたどることができるだけでなく、我々はそのに、年中行事が内包する構造と、その変遷の普遍的な規則性を見ることができる。

重陽節はまたの名を重九節、菊花節、茱萸節ともいい、農曆九月九日に行われる。『易経』に「陽爻を以て九と為す」とあるように、九は陽数であった。九月九日は月と日の二つの陽数が重なるため、重九あるいは重陽と称した。

重陽の由来は先秦戦国時代に遡ることができ、後世に伝えられるうちに広く伝播し、変質しながらひとつの習俗となった。伝えられるところによれば、重陽節の登高の俗は紀元前5世紀頃、斉の景公に始まるという。屈原もまた「集重陽入帝宮兮」の詩句を詠んでいる。さらに漢初の戚夫人も扶風の地に娘を嫁がせた際、宮中の重九節に言及しており、戦国時代から漢初にかけて、重陽の風俗がすでに民間から宮廷に入っていたことが分かる。三国時代の魏の文帝曹丕の『九日与鐘繇書』の中には「歳往き月来たり、忽として九月九日に逢う。九は陽数なり。而して日月並びに必ず。俗、其の名を嘉して以て長久に宜しと為す。故に以て享宴高会す」とある。『晋書・礼志』では次のようにも言う。九月九日は、「秋金の節、武を講じ射を習い、立秋の礼に象る」と。『晋書・孟嘉伝』には、桓温が九日に登高し盛大な宴会を催したという故事が見える。唐代に至り、皇帝からの特別な批准が下され、重陽節・中和節・三月上巳節を合わせて三節令とした。その後これらの風俗は民間各地で盛んに行われ、宋・元・明・清時代を経ても衰えを見せず、現在に至るまで続いているのである。

伝統的な重陽民俗の主なものには登高、郊游、飲酒宴饗、賞菊、茱萸^{注1}を挿す等がある。登高については『風土記』の中には「重陽に会い、山に登って酒を飲みかわすことを登高会、またの名を茱萸会という」とある。伝えられるところによれば、漢代の長安の近郊に高台があり、毎

※北京大学社会学研究所助理研究員

年重陽節になると人々は連れ立って登り、遠方の風景を眺め楽しんだという。長安城の東南にあったという庭園、楽游苑も重陽登高の格好の場であった。その後登高の範囲は次第に山丘、丘陵、野原、城壁、寺塔、楼閣などに広がっていった。膨大な地方志の記載によれば、各地の登高は主としてその地の名山に登ることであったという。

歴代の文人たちの登高の詩賦からは当時の重陽登高の雰囲気を知ることができる。李白は『九日登巴陵望洞庭湖水軍』の詩に曰く、

九日天気晴、
登高無秋雲、
造化辟山岳、
了然楚漢分。

盧昭鄰の『九月九日登玄武山』の詩には

九月九日眺山川、
歸心歸望積風煙。
他鄉共酌金花酒、
万里同悲鴻雁天。

重陽の頃は天高く爽やかな季節であり、人々は郊外に出て秋の風物を楽しんだ。春の清明節の“踏青”（青草を踏む）に対して、重陽節の郊遊を“辞青”（青草に辞す）と呼ぶこともある。重陽の民俗に見られる登高は一種の野外遠足的なスポーツということもできる。

重陽の登高の俗と関係の深いものに賞菊の俗がある。

岑参の『行軍九日思長安故園』の詩に曰く、

強欲登高去、
無人送酒來。
遙憐故園菊、
応傍戰場開。

現代では、毛沢東に『采桑子・重陽』という詩がある。

歳々重陽、
今又重陽、
戦地黄花分外香。

岑参の詩からはあふれんばかりの意気盛んな様子が伝わってくる。この外、孟浩然、杜甫、黄巢等が重陽の菊を詠んだ有名な詩が後世に伝えられている。黄花はまた金花ともいい、これはみな菊花のことである。重陽の頃はまさに菊科の花が満開になる季節なので、九月はまた菊月ともいう。重陽の郊野登高、賞菊の俗は季節にふさわしい習わしだったのである。重陽賞菊の俗は、

晋代の“菊愛好家”陶淵明の重陽に友に会うという故事に遡ることができる。宋人孟元の『東京夢華録』の中には、北宋の都汴京の重陽賞菊の情景が記されている。菊花の品種は非常に多く、万齡菊、挑花菊、木香菊、金玲菊、喜容菊などがある。酒家の中にはへやを菊花で飾るところもあった。周密の『武林旧事』によれば、南宋臨安の重陽節には髪に菊花を挿す美風があったという。清代になると重陽節の前後に菊の観賞会が催され、大いに賑わった。観賞会では、歌詠み会や菊の絵画会なども共に開かれた。

重陽の民俗の中でもうひとつ重要なのは、茱萸を挿す風俗である。茱萸は常緑の小喬木で春に花が咲き、秋に紫の実を結ぶ。実は薬にも用いる。

唐代の詩人王維は『九月九日憶山東兄弟』という詩で次のようにうたっている。

独在異郷為異客，
每逢佳節倍思親。
遙知兄弟登高處，
遍插茱萸少一人。

漢魏六朝の時代から明清時代にかけて、多くの古人が詩文の中に茱萸を挿す風俗を詠み込んでいる。登高して酒を飲み、茱萸を頭に挿したり身につける習慣は悪気を払い、初寒をはばむという意味があった。

古代中国の多くの年中行事がそうであるように、重陽節にも多くの節食があった。たとえば宴会を開いて菊花酒や茱萸酒を飲み、重陽糕を食し、また互いにハレの食物を贈り合う。『齊人月令』には、重陽登高の宴には糕と酒を持っていき、酒には茱萸や菊を散らし酔いつぶれるまで飲むとある。盧昭隣の詩にはいわゆる金花酒、すなわち菊花酒の事が出てくる。菊花酒は九月九日に花・茎・葉を摘み、黍・米につけこんで醸すると次の年の重陽節に飲むことができる。人々は重陽節に菊花酒を飲むと寿命が伸びると信じていたので、またの名を長寿酒という。『遼史』によれば「重九節に茱萸酒を門戸に撒き厄払いをする」習俗があった。『天津府志』の中の慶雲県の民俗には、重九の日、尋菊、登高のほか茱萸酒、菊花茶を飲むとある。中国の伝統医学から言うと、菊花酒と茱萸酒は目によく、血圧を下げ、肝臓に利き、腹を暖める。また減量、止痛、蚊に刺されないといった薬効もあり、薬酒とも呼ばれた。

重陽糕に関しては、すでに『荆楚歲時記』の記載に見ることができる。『東京夢華録』はこの重陽糕にふれ、獅蛮糕棗糕、菊花糕などの種類があったという。もち米、もち粟、粟、大豆、小麦粉等をこねて蒸し、その上に栗の実、銀杏、松の実、柘榴の種などを宝石のようにちりばめる。唐代の重陽糕の上には重陽の小さな旗を挿し、吉祥をあらわした。宋代の重陽糕の上には五色の剪綵の旗を挿した。いわゆる“獅蛮”とは小麦粉で獅子、蛮王の像をつくり糕の上にのせたもので、邪を払う意味があった。清代の播榮陞の『帝京歲時紀勝』、富察敦崇の『燕京歲時記』は、北京で重陽糕の風俗が盛行した様子を記している。清代には重陽糕は花糕と呼ばれ、上には五色の花糕旗を挿した。種類も非常に豊富で、市場にも出回った。また九層の重陽糕がつくられたの

は、重九つまり九に重ねるという意味で縁起を担いだのであろう。

この外、重陽の民俗として、親しい友人への贈物や死者への供物、お世話になった人へのお礼、騎馬射撃、凧揚げ、子供の遊戯、さらに老人の長寿祝い、嫁いだ娘の里帰りなどがある。これらは時代を異にする風俗が次第に積み重なっていった結果なのか、あるいは各地に広まる中で変化しつつ形成されたものかもしれない。

重陽節の民俗を解釈するに当たっては、一定の蓋然性が存在している。我々は脈々と流れる歴史の変遷の中でそうした民俗を見ていかなければならず、また各地の風俗の差異とその意味にも注意しなければならない。

重陽節は古代漢民族の伝統的な節令だが、中古以後の地方志の記載によれば、少数民族地区にはほとんどこの風俗は見られない。漢民族の移民地区においてさえ、重陽の風俗はかなり薄れ、重要な民俗行事としての意義は失われている。

重陽の俗は、民国以降農暦の廃止と共に次第に衰退した。ただ現在でも伝統的な民間の節句として、その意義の喪失、形の変化はあってもなお、多くの地方に存在している。

重陽の俗は、社会階層によって、しばしば異なる様相を見せる。たとえば登高会飲、吟詩賞菊などは城邑の士大夫たちに流行した風俗で、郷村の村人たちはお互い花糕を贈り合うくらいのものであったという。『東豊県志』によれば、酒や糕に凝り、茱萸を挿すのは文人たちだけで、日々の暮らしにあくせくしなければならない無知な庶民たちには関係の無いことであった。また地域によっては重陽節には村の塾が休みになり、修学旅行や山登りをする学校もあったというが、これは一步一步高みをめざそうという意味が込められていたのであろう。

重陽の民俗を理解するに当たって、民間に受け継がれてきた諸語の法則を当てはめることができる。たとえば九九は久久と韻を踏み、長久、長寿、年々豊作の意となる。糕は高と韻を踏み、糕を食べたり、高台に登るのは、一步一步高みをめざす意となる。また花糕を贈り合う習慣はお互いに祝福しあうという意味が込められている。棗なつめの入った重陽糕は棗と早が韻を踏むため、早起きして登高する、すなわち早く目的に到達しようという願いが込められている。

重九節の始まりはまた、古代中国人が数字が神秘的な魔力を持つと信じていたことと深い関係がある。九は古代中国においては、陽数とされ、また極数、すなわち陽数の極と見なされた。九の陽数を重ねることは陽の気が最大になることを意味する。『易経』では陽九は災為りという。したがって重陽の俗は禍を避け、災をはらい、邪、悪気を鎮めるという象徴的な意味を持つのである。茱萸を挿し、菊酒を飲み、獅蛮糕を食べるのも、この点でみな同じである。古人は菊花と長寿を結びつけて考えた。人々が菊を食し、薬酒として飲んだのも、健康延年祈願と、厄払いのふたつの意味が込められていたのである。

また重陽登高の俗は汝南の桓景の故事^{注2}にちなんだものとする種の俗説を信じるわけにはいかないが、禍を避け、健康、長寿を願うものとの意味は依然として相通じるものがある。杜甫の『九月蘭田崔氏庄』には「明年此会知誰健，醉把茱萸子細看」の詩句があり、重陽の俗が健康祈願の意味を含んでいたことを示している。

重九の由来はまた、節気とも関連が深い。古人は重九節に関して立秋の礼にならい、初寒をはむとの諸説を残している。民国年間のある地方では風雨が強い日を“冷節”と称した。この外、民間には“初日に雨が降らなければ重陽、重陽に降らなければその冬は雨が少ない”や“重陽に雨が降らなければ十三日、十三日にも降らなければその年の冬は雨が少ない”といった類いの諺が広く流行していたが、重陽の節令としての意義は一目瞭然である。

もちろん、九九重陽にはもともと、農耕民族が豊作を祝うという意味があった。黄金の秋九月はまさに収穫の季節である。重陽に糕を食べるのは、本来収穫の際の新嘗の儀式にはじまり、その後節食に変わった。あるいは周代の新嘗祭の儀礼に起源をもつものかも知れない。重陽と新嘗の結び付きは各地の重陽民俗にみられる、新穀を土地神に供えて感謝し、供儀を捧げる儀式、すなわち祈年祭（『薊州志』等）からも明らかである。『綏德州志』には重陽節、農家では豊作を祝って花糕を食べる。また“九月九家々有”の諺にもあるように、遥かな古代の遺制をまだ残しているのである。

重陽節の民俗に関しては、古代中国の礼楽と礼俗の間の融合関係に注意する必要がある。官府が民間の歌を採集するように、礼俗が礼楽に昇格して、ようやく礼楽が民間の礼俗の中に押し進められていき、知らず知らず民間生活に感化を及ぼすのである。『周礼』には「俗は習いである。上にたつ者が感化することを風、下々の者がこれに従い習うことを俗という」とある。古代中国の民俗生活におけるこの種の関係は重陽の俗の中にも反映されている。重陽はもともとは民間の節礼として始まり、後に、皇帝の恩恵が郷里の隅々まで行き渡るという趣旨で欽定が下され、宮廷の中に入っていったのであった。宋、明、清代の宮廷では、皇帝自ら登高し、宴を催して群臣花糕を賜ったといい、臣民同楽の意が含まれていた。

重陽の民俗は古代中国漢民族の美俗であり、意義深い節句の一つである。重陽の俗は明るく豊かで健康的であるばかりでなく、雅やかな情緒をもっている。そこには日々を美しく暮らすことへの古人の願いが反映されていたのである。もちろん文人たちの書にみられる重陽の雰囲気はそれぞれ多少違いがある。陶淵明は人生を飄々と生きる楽しみを、王維は望郷の思いを、杜甫は過ぎ去った年月への嘆息の思いを、蘇東坡は秋の憂愁に満ちた無常感を、李清照は凄絶たる孤独感をそれぞれうたっており、士大夫たちの意識と民間の庶民たちとの違いを十分感じ取ることができよう。

重陽の民俗は現在でも、程度の差はあれ中国の多くの地方に残っている。それは貴重な文化遺産、文化資源として、現代でも重視され、また若干新しい内容が付け加わってきている。1984年、中国登山協会、中華全国体育総会連合は、“九九”の登高の伝統を復活させ、大衆的なスポーツ活動を率いて、国民の健康促進、環境保護を推進していくことを提案した。その年の重陽節、北京市では香山において重陽登山大会が催された。また近年、重陽節に友情と祝福を込めて菊花を贈りあう習慣が流行しつつある。重陽の前後に行われる各種の菊展も人々の高潔な心を育てるものである。この外、北京市は九月九日を敬老の日と定めた。古代重陽の民俗がこのように我々にとっての滋養となり、今後とも中国人民の生活の貴重な財産として尊重されることを我々は願っ

ている。

1990年1月5～6日

『比較民俗研究』創刊に際し

北京大学暢春園にて記す

〔訳者注〕

1) 茱萸はわが国ではグミと訓みならわされているが、グミではなく呉茱萸のことである。呉茱萸の実は山椒に似て房をなし、色は紫赤色、核がほとんどなく皮ばかりなので和訓を「かわはじかみ」という。(中村喬『中国の年中行事』平凡社、1988、p. 202)

2) 後漢時代、汝南の桓景は費長房に従事して長年遊学していた。あるとき長房が景にいうには、「九月九日に汝の家に災厄があるであろう。汝は急いで帰り、家人それぞれに絳囊^{あかいふくろ}をつくり、それに茱萸を容れて臂^{うで}に繫けさせ、高みに登って菊花酒を飲ませるがよい。そうすれば災厄は避けられよう」と。景はその言葉どおりにして、家じゅう皆な山に登って夕方に帰ってみると鶏犬牛羊が皆な急死していた。長房はその報告を受けると、「それらが身代わりになったのだ」といった。今日世の人々が、九日に登高し飲酒し、婦人たちが茱萸囊を帯びるのは、けだしこれより始まったのである。(同書、p. 196)

(志賀市子訳)

新刊紹介

“外からみた日本”

『民族学研究』vol 54—3

民族学と民俗学の関係は、異文化と自文化研究のちがいがいなどと言われても分かったような分からないような気もする。自民族研究ということでは、日本語と国語研究のような関係さと言う人もいる。比較民俗学研究を志向する我々は今一度、この問題に正面から取組まなければならないだろう。日本の人類学者が逆に日本文化を知らないとしてR. スミスが本書中の「米国における日本研究」動向で指摘しているように、諸外国研究者が最も興味を示す日本の文化人類学的データは社会学、歴史学等に委ねられている。民族・民俗学の共同体勢にある筑波大学の文化人類学の存在がここで強味を発揮することになる。

日本人による異文化研究発表誌である『民族学研究』が外からみた日本として、外国人による日本研究と英、米、ヨーロッパ、ソ連、韓国、

中国における日本研究の動向を特集した今号は時宜にかなった企画であるといえる。

「農村の経済発展と女性の地位—日・韓の比較」(文玉杓)の論文は今号の田薇論文と併読すると興味深い。他に都市近郊の老人会の研究(B. A. エアル)、台湾における天理教の伝道と受容(黄智慧)、日本の陶芸の人類学的考察(M. ブライアン)、商家同族団の組織と理念(朴慶沫)など10の論文、研究ノートの力作が並んでいる。会員の何彬(北京師範大)も日本留学の成果を「日本の兩墓制」として発表している。巻末の「日本研究をどう考えるか」という座談会も興味深く是非一読をすすめたい。

(佐野賢治)

『民族学研究』54—3、日本民族学会刊、

1989年12月刊、頒価2100円